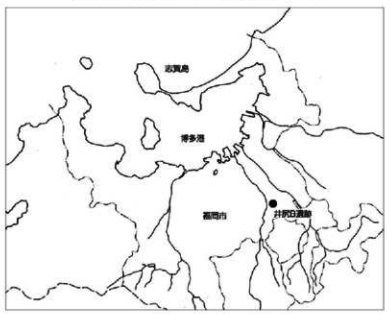
井尻B遺跡17

― 井尻B遺跡第26次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第973集



調査番号　0629
遺跡略号　IGB-26

2008

福岡市教育委員会

序

二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、二十一世紀のアジアに開かれた都市として、更なる発展を目指しさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、南区井尻１丁目８７番１で実施した共同住宅の建設に先立って実施した井尻Ｂ遺跡第２６次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、水田跡が発見されました。水田は、私たち日本人の食生活に欠くことのできない米を産み出す貴重な生産手段です。隣接する都市計画道路の新設で実施された第１３～１８次調査の調査成果と併せると、井尻の地における集落と人々の営みを支えた生業の関わりと歴史を解明する上で興味深い発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、株式会社タイヘイをはじめとする多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成２０年３月３１日

福岡市教育委員会
教育長　山田　裕嗣

れいげん

1．本書は、福岡市教育委員会が分譲型共同住宅の建設に先立って、平成１８（2006）年度に、福岡市南区井尻１丁目87番1で緊急発掘調査した井尻B遺跡第２６次調査の発掘調査報告書である。
2．本書に使用した方位は、すべて磁北方位である。
3．本書に掲載した遺構と遺物の実測および製図は、小林義彦と今村ひろ子が作成した。
4．本書に掲載した遺構と遺物の写真は、小林が撮影した。
5．本書の執筆・編集は、小林が行った。
6．本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

本 文 目 次

序　　頁

Ⅰ．はじめに …… 1

　1．発掘調査にいたるまで …… 1

　2．発掘調査の組織 …… 1

　3．立地と歴史的環境 …… 3

Ⅱ．調査の記録 …… 7

　1．調査の概要 …… 7

　2．基本層序 …… 8

　3．水 田 跡 …… 8

　4．包含層出土の遺物 …… 9

　5．小 結 …… 11

挿 図 目 次

Ｆｉｇ．　1　周辺遺跡分布図（1／25,000） …… 2

Ｆｉｇ．　2　井尻B遺跡位置図（1／5,000） …… 4

Ｆｉｇ．　3　井尻B遺跡第２６次調査区位置図（1／1,000） …… 7

Ｆｉｇ．　4　井尻B遺跡第２６次調査区現況図（1／500） …… 8

Ｆｉｇ．　5　第２６次調査区遺構配置図（1／300） …… 9

Ｆｉｇ．　6　土層断面柱状模式図 …… 10

Ｆｉｇ．　7　調査区西壁土層断面（東より） …… 10

Ｆｉｇ．　8　調査区全景（南東より：CG合成） …… 11

Ｆｉｇ．　9　水田跡畦畔（南より） …… 11

Ｆｉｇ．１０　出土遺物実測図１（1／3） …… 13

Ｆｉｇ．１１　出土遺物実測図２（1／4） …… 14

Ｔａｂ．　1　井尻B遺跡調査一覧表 …… 6

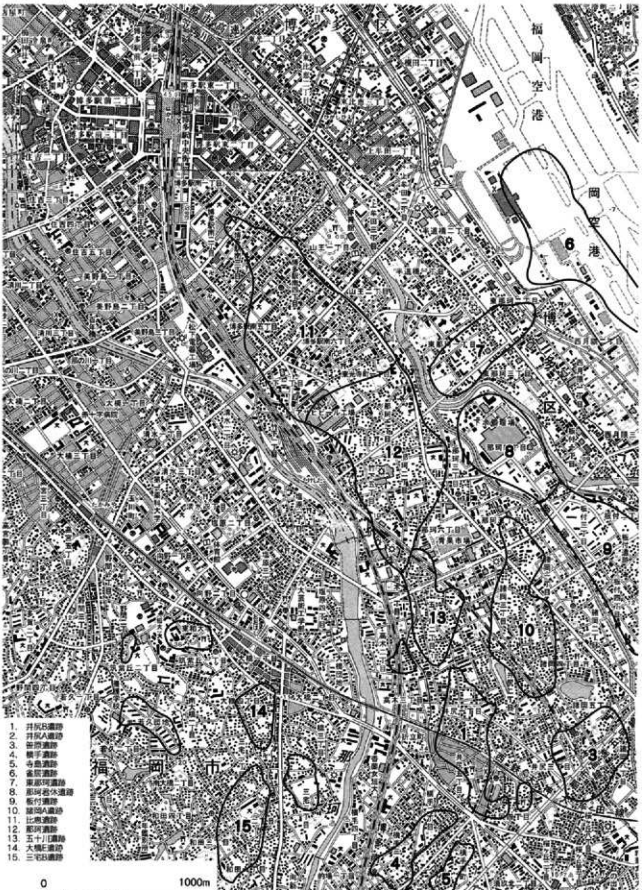


Fig. 1 周辺遺跡分布図（1／25,000）

Ⅰ．はじめに

1．発掘調査にいたるまで

井尻B遺跡は、福岡平野を北流する那珂川に沿って春日市の須玖岡本から井尻・五十川・那珂・比恵へとつづく低丘陵上に立地している。この那珂川以南の地は、昭和30年代まで農業を基盤とする村落が点在するのどかな田園地帯であった。しかし、高度経済成長期の昭和40年代以降、郊外の市街化が急速に進み、往年の田園風景は次第に失われつつある。

井尻は、春日市の岡本から那珂・比恵へと続く低丘陵の中ほどに位置する。この地は、北へ行けば竹下、南は春日、東は板付～月隈、西へは曰佐への分岐点にあたり、西鉄大牟田線の井尻駅周辺は、交通の利便性に長じた地として早くから本村を中心に住宅域が拡がっていた。そのため比較的狭い道路が村中を網の目状に延びている。しかし、都市計画道路御供所井尻１号線の整備に伴って周辺の様相は一変し、低中層の共同住宅建設が増加している。

第２６次調査区もそのひとつで、平成18（2006）年に株式会社タイヘイから井尻１丁目87番1における共同住宅の建設計画が提出された。申請地は、平成９年に開発計画があり、同年12月7日に試掘調査を実施して弥生時代から古代の遺物包含層と土壙を検出していた。この結果と都市計画道路御供所井尻１号線の調査成果から建築物によって破壊される範囲を発掘調査して記録保存を図ることとなった。

発掘調査は、平成18年7月18日の草刈り作業からはじめ、9月5日に無事終了した。この間、7月31日から8月4日の一週間に亘って株式会社タイヘイによるボーリング調査があり、発掘調査は中断した。また、局地的な集中豪雨による調査区壁面の崩落と排水ポンプの埋没が重なり、調査に多大な支障を生じながらも多くの成果を残して終了した。

発掘調査にあたっては、株式会社タイヘイの谷川氏をはじめとする関係者諸氏のご協力と発掘作業に従事した方々の労苦に改めて感謝します。

2．発掘調査の組織

調査委託　株式会社　タイヘイ
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　文化財部埋蔵文化財第１課
　文化財部長　矢野三津夫（現任）　山崎純男（前任）
　埋蔵文化財第１課長　山口譲治
　埋蔵文化財第１課調査係長　米倉秀紀(現任)　山崎龍雄（前任)
調査庶務　文化財管理課　榎本芳治（課長）　鈴木由喜（担当）
調査担当　埋蔵文化財第１課　小林義彦
調査・整理作業
　石橋陽子　今村ひろ子　大瀬良清子　兼田ミヤ子　近藤末孝　関哲也　知花繁代
　塚本よし子　土斐崎孝子　西田文子　野田淳一　原勝輝　播磨博子　松尾千寿
　三栗野明美　米良恵美　森田ちはる　森田裕子　矢川みどり　安高邦晴　渡邊和幸

なお、発掘調査にあたっては、蔵富士寛氏（埋蔵文化財第１課）に多大な協力を得た。

Fig. 2 井尻B遺跡位置図（1／5,000）

3．立地と歴史的環境（Fig.１・２）

井尻B遺跡群のある福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘にむかって開口する博多湾に面した沖積平野である。

この福岡平野の中央部を北流して博多湾に注ぐ那珂川と御笠川の間には、標高11～15mの低丘陵が北の博多湾にむかって断続的に長く延びている。この春日丘陵と総称される洪積丘陵は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上層に阿蘇山の噴火によるAso―4火砕流によって形成された八女粘土層と鳥栖ローム層が堆積する火砕流台地で、台地内には小さな開析谷が幾筋も彎入して複雑な地形をなしている。この春日丘陵は、奴国王の王墓地と推定される岡本遺跡のある須玖岡本から井尻、五十川を経て那珂、比恵へと連なって博多湾の海岸砂丘に至る。これらの丘陵上には、後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連綿と複合的に重なって展開している。殊に、弥生時代から古代にかけては濃密な分布状況を示している。

井尻B遺跡は、春日丘陵が標高を下げながら那珂・比恵丘陵へと続く標高は11～18mの低平な台地の鞍部に立地している。この井尻B遺跡については、古くには江戸時代の儒学者青柳種信の著書「筑前國續風土記拾遺」の那珂郡井尻村の条に、「熊野権現の銅矛鋳型」や「大塚」、「古瓦多く出、昔大寺など有りし」などの記述がある。また、大正13（1924）年～昭和2（1926）年には九州帝国大学の中山平次郎博士が甕棺墓や竪穴のほか瓦の包含層について報告され、寺院基壇の整地層の可能性を指摘され、早くから考古学界には知られていた。この井尻B遺跡おける発掘調査は、昭和56（1981）年の第１次調査に始まり、以来30地点で調査が実施されて、丘陵上における遺構の拡がりや消長が次第に明らかになりつつある。

ここで井尻B遺跡を概観すると、その初現は後期旧石器時代に始まり、第２次調査や12次調査で細石刃やナイフ形石器、石核が出土している。その後、縄文時代は長きに亘って人跡は途絶える。

弥生時代になると、台地の北西端で弥生時代草創期の夜臼式や板付Ⅰ式の土器が散見される。中期には貯蔵穴群や甕棺墓などが拡がっているが、密度的には散漫な分布を示す。後出する遺構からこの期の遺物が大量に出土することを勘案すると多くの遺構は削平されて消失した可能性も考えられる。須玖岡本遺跡を頂点とする奴国全盛の後期になると、竪穴住居や掘立柱建物を中心とする集落遺構が丘陵の全域に濃密な拡がり、一大拠点集落としての様相を示す。中でも丘陵の中央尾根線上に位置する第６次調査や11次調査、17次調査では、小型仿製鏡や銅鏃、銅弋、銅矛、ガラス勾玉などの鋳型や小型仿製鏡、小銅鐸、銅鏃などの青銅製品と坩堝や青銅滴付着土器など青銅器やガラス製品を製作に不可欠な遺物が出土している。このことは井尻丘陵に青銅器やガラス製品などを生産する工房的集落があったことを示唆するものである。一方、井尻B遺跡から南東へ１kmの岡本丘陵には、奴国王墓を擁する須玖岡本遺跡があり、奴国の中心地として広く知られている。この須玖岡本遺跡には、奴国王墓や甕棺墓群を主体とする墳丘墓が点在し、その前面に拡がる裾野の沖積地には、青銅器の工房跡である永田遺跡や坂本遺跡、黒田遺跡のほかガラス製品工房跡である五反田遺跡があるほか、南西方にはガラス勾玉鋳型や小型仿製鏡が出土した弥永原遺跡があり、その東には後漢鏡を副葬した日佐遺跡が隣接している。また、井尻B遺跡から北へ続く丘陵上の那珂遺跡や比恵遺跡でも銅弋の鋳型や取瓶や中子などの鋳造用具が出土している。これらのことから須玖岡本遺跡を中心として北へ延びる井尻～五十川～那珂～比恵へと続く丘陵上には、青銅器やガラス製品を鋳造する有力な拠点的集落が丘陵ごとに展開していたものと推考される。このように青銅器やガラス製品を鋳造する奴国の有力な拠点的集落として丘陵上の各所に展開した集落群も古墳時代初めを境として希薄になる。この期の墓域としては、土壙墓や木棺簿、石蓋土壙墓などが第２次調査や２７次調査で検出されている。また、これに先行する中期の甕棺墓群が、第１６・１７・２７次調査など丘陵の北側で検出されている。

古墳時代になると、５世紀後半には丘陵南側の第２・５次調査で墳径が25mの前方後円墳の可能性がある円墳（井尻B１号墳）が造営される。「筑前國續風土記拾遺」に記された「大塚」を想起させる。この間途絶した集落域は、６世紀後半～７世紀に掘立柱建物を中心に再び展開するが、その有り様は疎らである。７世紀後半～８世紀前半には、丘陵中央部の第１・３・１７次調査で百済系単弁瓦を初めとする丸瓦や平瓦が、１１次調査では「寺」とヘラ描きされた須恵器皿が出土しており、寺院跡（井尻廃寺）の存在が指摘されている。北の那珂、比恵でも老司式の古代瓦を伴う溝などが検出されており、寺院あるいは官衙の存在が想起されている。また、東には太宰府からの官道に沿って高畑廃寺がある。一方、那珂川を挟んだ左岸には銅箸や匙、富寿神賽などが出土した三宅廃寺があり、平野内の拠点には各々に古代寺院が建立されていたものと推考される。これ以降、８世紀後半から古代末、中世の遺構はきわめて希薄で開析谷を隔てた北の五十川遺跡～那珂丘陵に多く見られる。

遺跡名	調査番号	調査年	所在地	調査原因	調査面積(㎡)	報告書	遺跡の概要	主な遺物
第１次調査	8124	1981	井尻１丁目111−1外	共同住宅建設	600	111	土壙、溝、水溜状遺構	丸・平瓦
第２次調査	8610	1986	井尻５丁目175−1	共同住宅建設	930	175	旧石器、弥生～古墳；掘立柱建物、土壙墓、古墳	細石刃、石核、ナイフ形石器、円筒埴輪、家形埴輪、ガラス小玉
第３次調査	9201	1992	井尻１丁目203−1・2外	共同住宅建設	1,060	411	弥生～古墳；住居跡、井戸跡　古代；住居跡、溝	碧玉勾玉、鉄斧、百済系単弁軒丸瓦
第４次調査	9335	1993	井尻１丁目747−1	共同住宅建設	390	412	弥生後期～古墳前期；住居跡、掘立柱建物、井戸跡、土壙	
第５次調査	9408	1994	井尻５丁目１７１−３	医院建設	130	441	古墳；円墳	円筒埴輪、家形埴輪、ガラス小玉、鉄剣、鉄刀
第６次調査	9501	1995	井尻４丁目170、171−1	共同住宅建設	800	529	弥生後期～古墳初頭；住居跡、掘立柱建物、井戸跡、土壙	小型仿製鏡、銅鏃鋳型、ガラス小玉
第７次調査	9520	1995	井尻１丁目363−2外	個人住宅建設	69	年報Vol.10		
第８次調査	9667	1997	井尻１丁目13番地内	団地建て替え	113	571	弥生～古代の遺物包含層	
第９次調査	9745	1997	井尻５丁目6−33	共同住宅建設	132	678	弥生後期；住居跡	
第10次調査	9758	1997	井尻１丁目27−13	個人住宅建設	153	678	弥生～古墳；溝　古代；掘立柱建物	百済系単弁軒丸瓦
第11次調査	9809	1998	井尻１丁目13番地内	団地建て替え	690	644	弥生中期～古墳初頭；井戸跡、土壙	銅矛鋳型、銅鏃、鐸形土製品
第12次調査	9865	1999	井尻４丁目170−1外	共同住宅建設	125	645	弥生後期～古墳初頭：住居跡、掘立柱建物、	細石刃核
第13次調査	9953	1999	井尻１丁目755−8	個人住宅建設	60	年報Vol.14	弥生後期；住居跡　中世；溝	
第14次調査	9958	1999	井尻１丁目13番地内	市道御供所井尻線新設	952	736	弥生；掘立柱建物　古墳；井戸跡	銅鏃鋳型
第15次調査	9965	2000	井尻１丁目362−3	共同住宅建設	36	年報Vol.14	中世；溝	
第16次調査	0004	2000	井尻１丁目729−1	事務所建設	132	721	弥生中期；甕棺墓、土壙墓、土壙	
第17次調査	0027 0090	2000	井尻１丁目地内	市道御供所井尻線新設	3,657	787 834 918	弥生後期～古墳前期；住居跡、掘立柱建物、土壙、井戸跡、甕棺墓	小型仿製鏡、小銅鐸、ガラス勾玉・銅戈鋳型
第18次調査	0028	2000	井尻１丁目757−3	共同住宅建設	186			
第19次調査	0043	2000	井尻５丁目12−32	共同住宅建設	133			
第20次調査	0116	2001	井尻１丁目283−1	共同住宅建設	69			
第21次調査	0126	2001	井尻５丁目９−2外	共同住宅建設	366	788	弥生；甕棺墓、住居跡、土壙、溝　古代；溝	
第22次調査	0133	2001	井尻１丁目735−5	個人住宅建設	141	923	弥生、奈良、中～近世；掘立柱建物、土壙、溝	
第23次調査	0474	2004	井尻５丁目163−3	共同住宅建設	22	年報Vol.19		
第24次調査	0489	2004	井尻５丁目163−1外	共同住宅建設	66	年報Vol.19	弥生；柱穴　古代；土壙、溝	
第25次調査	0613	2006	井尻１丁目754−2外	共同住宅建設	80			
第26次調査	0629	2006	井尻１丁目87番１	共同住宅建設	614	973	中世；水田跡	
第27次調査	0641	2006	井尻１丁目763−3外	共同住宅建設	133	整理中	弥生後期；掘立柱建物、土壙、甕棺墓、土壙墓	朝鮮系無文土器、文字瓦、青銅器鋳型中子
第28次調査	0658	2006	井尻４丁目170−12	共同住宅建設	241	整理中	弥生末～古墳初頭；住居跡、溝	家形埴輪
第29次調査	0668	2006	井尻５丁目175−1	銀行支店	87	整理中		
第30次調査	0734	2007	井尻５丁目143−17	店舗建設	129	整理中	弥生後期～古墳初頭；住居跡、掘立柱建物、落とし穴	
第31次調査	0765	2007	井尻５丁目160−6	個人住宅建設		調査中		

Tab. 1　井尻B遺跡調査一覧表

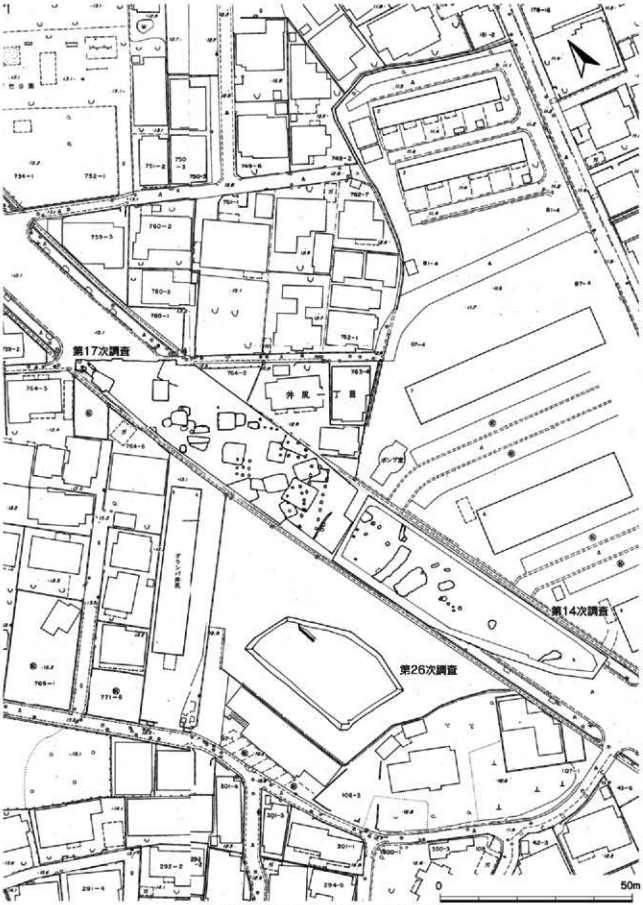


Fig. 3　井尻B遺跡第26次調査区位置図（1／1,000）

Ⅱ．調査の記録

１．調査の概要

井尻B遺跡は、福岡平野を北流する那珂川の右岸に沿って連なる春日丘陵が、標高を減じながら那珂・比恵へと続く低平な台地上に立地し、第２６次調査区は、この南北に長く延びる井尻台地の北東部に位置している。本調査区では、これまでに共同住宅等の建設計画が度々あり、1997（平成9）年12月17日には試掘調査を実施して古代の遺構や遺物包含層が確認されていた。また、1999（平成11）年には、市道御供所井尻線の新設に伴って第１４・１７次調査が実施され、弥生時代～古墳時代の住居跡や建物跡、井戸跡などが検出されている。

試掘調査等の所見では、本調査区の北側には台地の一部が架かり、南側には東方から浅い開析谷が彎入していると推測されたが、この開析谷は、昭和30年代の井尻公団住宅の建設に際して台地のレヴェルまで厚く盛り土されていた。発掘調査は、この盛り土を公団住宅建築以前の水田面まで掘り下げることから始めた。しかし排土に雑草が混入すると異臭を発するため繁茂する雑草の刈り取り作業を同時に進めた。発掘調査は、建物が複雑な矩形をしているために一部を割愛して実施せざるを得なかった。また、厚い盛り土による土量の多さから排土の仮置き場が確保できず、調査区を南北に２分割しての調査を余儀なくされた。発掘調査の結果、厚さ160cmの客土層下で南北方向に延びる水田

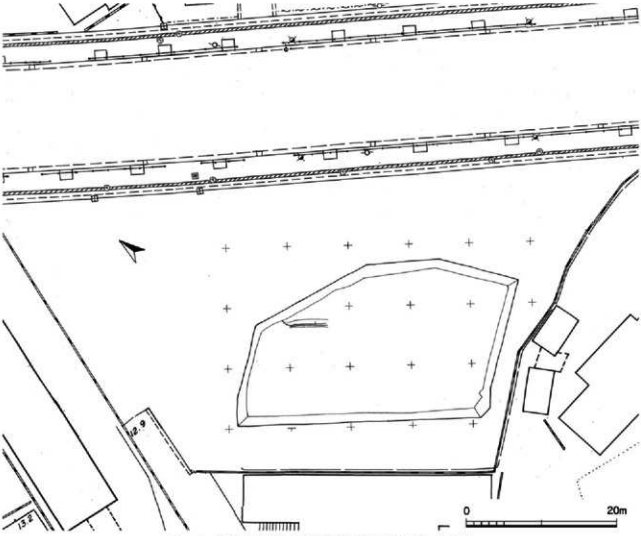


Fig. 4　井尻B遺跡第26次調査区周辺現状図（1／500）

の畦畔を検出したが、解体された建物の基礎による破壊が著しく、水口等の水利施設は検出されなかった。一方、調査区の北部には台地の南縁が架かり、古代の遺構が拡がっていることが予測されていた。しかし、台地の南縁は検出されず、台地は第１４次調査区から本調査区の北東縁にむかって延びているものと推測される。北側調査区の調査終了後は、直ちに排土を反転移動して南側調査区の調査に取りかかり、9月5日に埋め戻し作業を終えてすべてを終了した。この間、水田面ののる遺物包含層（黒色土層）は、層位の確認後、重機で剥ぎ取って包蔵する遺物を採集するに留めた。

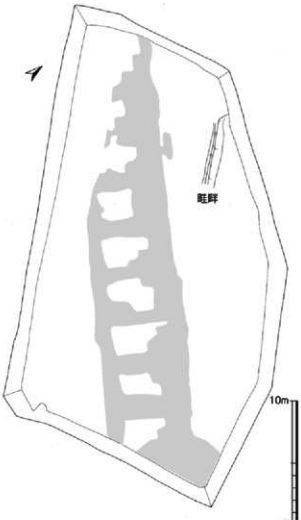


Fig. 5　第26次調査区遺構配置図（1／300）

2．基本層序（Fig.6・7）

調査区は、かつての公団住宅の建設に際して現況面まで厚く盛り土されていた。この盛り土は層厚が160cm程あり、その下層には茶褐色土層（20cm）・黒色土層（45cm）・黒色粘質土層（15cm）・灰黒色粘質土層（10cm）・灰色粘質土層（20cm）が順次堆積し、標高11.15mで粗砂層に達している。この砂層上には湧水点があり、砂層下の堆積土は観察できなかった。このうち黒色土層は、弥生時代中期～古代の壺や甕のほか平瓦や丸瓦など多様な遺物を包蔵する遺物包含層である。平瓦や丸瓦の検出は、周辺地の出土例と併せて、すぐ南に隣接して拡がっている井尻廃寺（第３次調査）の傍証となるものである。この黒色土層上で水田跡に伴う畦畔を検出したが、建物の基礎による破壊が著しく、遺存状況はきわめて悪い。この黒色土層上には茶褐色土層が、黒色土層下には黒色粘質土層が15～20cmの厚さで堆積していた。いずれも水田の可耕土と考えられるが、水田跡を証明する畦畔等は検出されなかった。また、層中には遺物をほとんど含んでいないためにその時期も特定できていない。この水田耕土と考えられる層中の一部には、ブロック状に堆積した砂層が観察され、河川の氾濫を容易に窺わせる。

3．水田跡（Fig.5・8・9）

水田面は、現地表を180cmの掘り下げた標高11mで検出した。水田土壌は、若干量の有機物を含んだ黒色土で、耕土中には砂粒をほとんど含んでいない。調査区の北東部で南北方向に延びる１条の畦畔を検出した。この南北にのびる畦畔は、現長が6.5mで、その北端が北東と北西へ又状に延びて２方向に分岐し、西側に２面、東側に１面の計３面の加耕面が残っている。水田面は、この畦畔を境にして西側が高く、東側が一段低くなっている。標高は、西側の高い水田面は、南側が11.46～11.5m、西側が11.35～11.4m。東側の低い水田面が11.2～11.3mで、その比高差は25～30cmである。畦畔は、低い東側の法面が緩やかに傾斜し、基底部幅が70～90cm、上縁幅が20cm、高さは10cmで、

黒色土上にやや灰色の濃い黒茶褐色土を薄く掻き上げるように練り重ねるように積み上げている。畦畔の上縁は、北へむかってわずかに低くなり、南側は消失しているために全容は明らかでない。水口等の水利施設も検出されず、水田の規模や構造は明らかではない。この畦畔の周りの水田面上には、明らかに人の足跡と考えられる長楕円形をした凹みのほかに不整な円形の浅い凹みが確認された。東に位置する第１４次調査区でウシの足跡が検出されており、その可能性も十分に考えられる。

４．包含層出土の遺物（Fig.１０～１２）

調査区の開析谷を埋め立てた整地層のうち、水田面をのせる層厚45cmの黒色土層中は、多様な遺物を包蔵する遺物包含層で、層中には弥生時代中期～古代の遺物が含まれる。また、それを挟む茶褐色土層と黒色粘質土層には遺物はほとんで含んでいない。

１は、口径が18.4cmの二重口縁壺である。朝顔状に外反した口縁部は、鋭く屈曲して内傾する。胎土は良質で、雲母微細と石英小砂粒を含み、焼成は良好。色調は淡明橙色。2は、口径が8.4cm、底径4.6cm、器高が7.1～7.6cmの小型壺である。口縁部は、偏球形の胴部中位に巡る三角凸帯から内傾して「く」字状に短く外反する。調整は、口縁部と凸帯がヨコナデ、胴部は上半がナデ、下半はナデ後にタテハケ目。内面は指頭押圧ナデ。胎土はやや粗く、石英細砂～小砂粒と雲母微細を含み、焼成は良好。色調は、暗赤茶色。3～7は壺の底部である。胴部は、3～6が大きく外反し、7は内彎気味に膨らんで砲弾形をなす。調整は摩滅が著しく不明瞭であるが、内面は指頭押圧ナデで、7の外面にはハケ目痕がある。4の外面にはヘラ状工

Fig．6　土層断面柱状模式図

Fig. 7　調査区西壁土層断面（東より）

Fig. 8　調査区全景（南東より：CG合成）

Fig. 9　水田跡湖畔（南より）

具による研磨痕があり、丹塗りの可能性がある。胎土は7がやや粗い外は精良で、雲母微細と微細～小砂粒を含む。色調は淡黄橙～淡橙、淡黄褐色。底径は3が8.4cm。4が7.4cm。5が7cm。6が10.8cm。7が8.8cm。8・9は甕の底部である。上げ底気味の底部は厚く、胴部は緩やかに膨らんで、倒卵形をなす。調整は内面が押圧ナデ、外面は粗いタテハケ目。胎土は粗く、石英小～中砂粒を多く含み、8にはシャモット様の赤褐色粒を含む。色調は淡黄褐色～灰茶褐色。10・11は高坏である。10の脚部は緩やかにラッパ状に外反する。調整は、坏部がナデ、脚内面は押圧ナデで、天井部は強い指頭圧痕によって半球形に凹む。外面はヘラ状工具によるタテ研磨。色調は外面が淡黒灰色、内面は淡黄褐色。11の短いラッパ状の脚部は、大きく外反する。淡黄橙色。いずれも胎土は良質で、微細～石英小砂粒を含む。12・13は嘴状の突起をもつ支脚である。12は嘴状突起を短く上方に摘み上げている。天井部は凹レンズ状に浅く凹み、1孔を穿つ。口縁部下と内面が強い指頭圧痕、外面はナデ調整。胎土には微細～小砂粒と雲母微細を含み、焼成は良好。外面は淡黄色、内面は淡黄～淡灰褐色。13は嘴状突起を水平に長く摘み出し、脚部は大きく外反する。調整は受け部が押圧ナデ。脚部は外面がナデ、内面はヨコナデ後にハケ目で天井部は強い指頭圧痕。胎土は粗く、石英細～小砂粒と雲母微細を含む。色調は外面が淡灰黒色、内面は淡褐色。14～17は器台である。15は受け部径が16.4cm。体部はストレートに開き、受け部は緩やかに屈曲して大きく外反する。調整は受け部がヨコナデ、脚部内面はタテ方向の粗い押圧ナデ。16は受け部径が2.4cm、脚裾径が14.8cm、器高は17.8cm。筒状の体部は厚く、受け部は摘み出すように短く外反する。平坦に整えた脚裾は内側に小さく摘み出す。調整は内面がタテ、外面がナナメ方向の押圧ナデ。胎土は粗く、雲母微細と石英小～中砂粒を多く含む。色調は淡明橙色。17は受け部径が11.8cm、脚裾径が11.2cm、器高は17.5cm。体部はストレートに開き、受け部は緩やかに外反する。調整は外面が粗いハケ目、内面はタテ方向の押圧ナデで、裾部には斜めのハケ目が残る。胎土は粗く、雲母微細粒と石英小～中砂粒を多く含み、焼成は良好。外面は淡橙色、内面は淡褐色。

18～20は、丸瓦である。18の裏面には模骨痕上に布目圧痕が、19の内面には竹状模骨痕が残る。21～27は、格子～斜格子文の平瓦である。23が土師質のほかは須恵質瓦である。22と27の裏面には布目圧痕が、23の裏面には竹状模骨痕上に布目圧痕が、また26の裏面には粗いハケ目状の調整が残る。胎土は良質で、色調は灰色～淡明橙褐色。

5．小　結

本調査区は、南北に長い井尻B遺跡北部の開析谷の中に位置する。東には市道御供所井尻線の新設に伴って調査された第１４・１７次調査区があり、第１７次調査区で検出された弥生時代中期～後期の住居跡や建物跡などの集落域を構成する台地の南縁が拡がっていると予測された。しかし、調査前に予測された台地は確認できず、調査区内には東から彎入した開析谷が拡がり、谷を埋め立てた整地層上で畦畔を伴う３面の水田面を検出した。畦畔の遺存状況は悪い上に、水口等の水利施設が未検出なためその構造や規模を明らかにすることはできなかったが、古代末～中世にかけての可耕地を拡げる土地開発法と牛耕を伴う生産力向上の一端を窺うことができる。

また、水田跡を造営する黒色土の整地層は、弥生時代中期～古代の遺物を内包する遺物包含層である。このうち丸瓦の中には竹状模骨のものがあり、南に隣接する第３次調査区の溝出土の瓦と同時期のものであり、井尻廃寺の存立と廃絶後の周辺域の消長を知る証左となるものである。今後は、周辺域の調査例の増加に伴って井尻台地における遺跡群の消長を検討することが望まれる。

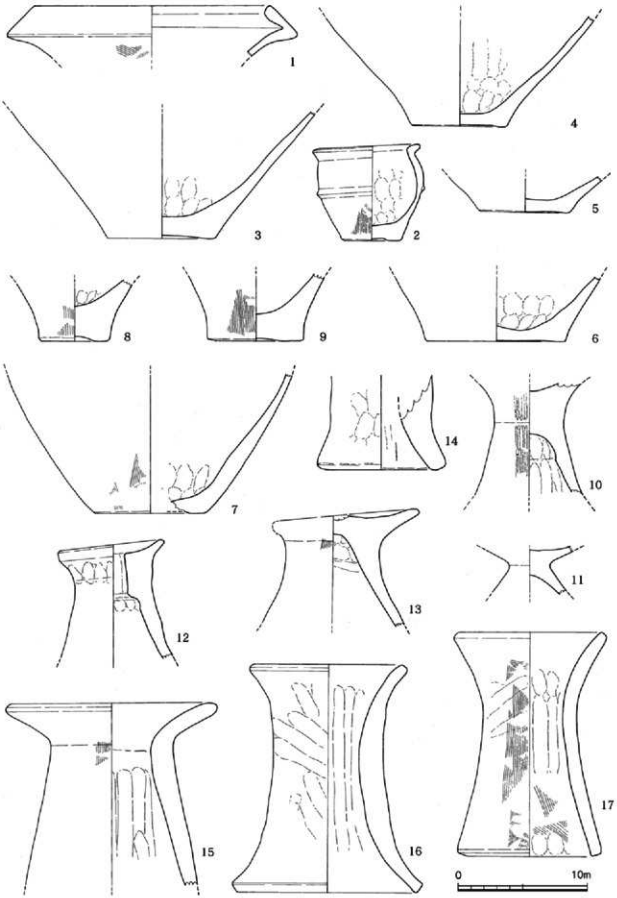


Fig. 10 出土遺物実測図1 (1/3)

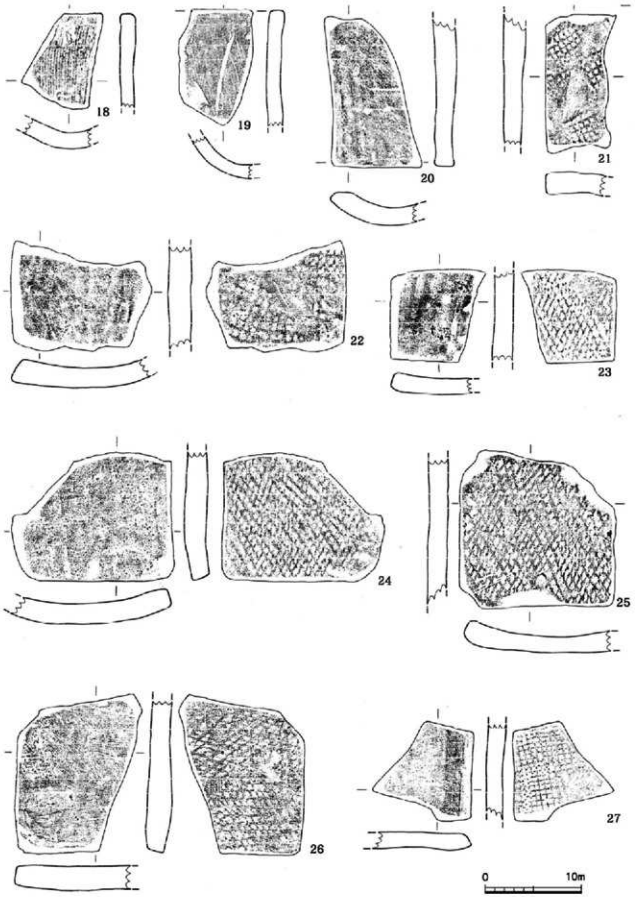


Fig. 11 出土遺物実測図2 (1／4)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いじりＢいせき１７
書　　名	井尻Ｂ遺跡１７
副書名	井尻Ｂ遺跡第26次調査報告
巻　　次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第９７３集
編著者名	小林義彦
編集機関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
井尻Ｂ遺跡 （いじりＢいせき）	福岡市南区 井尻１丁目 87番1 （ふくおかし みなみく）	40130	0090	33° 00′ 0″	130° 00′ 0″	20060718 ～ 20060905	614.1	共同住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井尻Ｂ遺跡 第26次	水田	中世	水田跡　畦畔	土器　瓦	

井尻Ｂ１７

－井尻Ｂ遺跡第26次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書９７３集

2008年（平成20年）3月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印　刷　今井印刷株式会社
福岡市中央区赤坂1-2-20

井尻B遺跡17

福岡市埋蔵文化財調査報告書第973集

2008

福岡市教育委員会